学習者のつまずきに寄り添う社会科教員のアプローチ

―インタビューとアンケートを通して―

学籍番号　229314
氏　　名　安部 寛人
大学院主指導教員　峯 明秀
大学院副指導教員　倉本 香

１．本研究の目的・意義・方法

第１章では，本研究における問題意識・研究主題・意義と特質を述べた。学習者は，日々の授業の中で学習上のつまずきを感じており，それは些細なものであっても，時間経過とともに根深いものとなっていく。そして，特に高等学校の段階であると，大学進学や就職等に大きく関係するため，生徒が望む進路を実現できなくなる要因にもなってくると考える。そのため，本研究では，生徒へのアンケート調査，教員へのインタビュー調査をもとに，①高等学校の段階における学習者の学びのつまずきの実態を明らかにすること，②学習者のつまずきに寄り添う社会科教員の在り方を仮説的に示すことを目的とする。

２．学習者のつまずきの実態

第２章では，実習校の生徒が抱える高等学校の地歴・公民科の学習の中で経験した学びのつまずき（学習内容がわからない，ついていけないことから，学びに向かう姿勢や意欲などにマイナスな影響があった経験）についての実態を明らかにした。大阪府立Ｔ高等学校の生徒 72 名を対象にアンケート調査を実施し，学びのつまずき，学びのつまずきに対するサポート，教員による学びのつまずきに対するサポートについてのデータを収集，分析した。その結果，生徒は個別的具体的知識でのつまずきを自覚している場合が多く，暗記や記憶に頼った勉強方法が要因としてあることが分かった。また，つまずきに対するサポートを求める対象として，「友人」の回答が多かった一方で，「教員」の回答は少なかった。ここから，教員に対する相談・援助アクセスが少ないことが課題であるとした。

３．実習校の教員によるつまずきへの対応

第３章では，実習校の社会科教員がどのように社会科の授業を行い，生徒と関わり，生徒の学びのつまずきを捉えているのかを明らかにした。大阪府立Ｔ高等学校の社会科教員４名を対象にインタビュー調査を実施し，授業，生徒との関わり，生徒の学びのつまずきについてのデータを収集，分析した。

４．学習者のつまずきに寄り添う社会科教員のアプローチ

第４章では，生徒へのアンケート調査，教員へのインタビュー調査の分析・考察を踏まえて，実習校の生徒に寄り添う社会科教員のアプローチを仮説的に示唆した。４名の社会科教員の特質の分析より，生徒との関わりが，学習者のつまずきを適切に見取るために肝要であると考えた。ここから，実習校における学習者のつまずきに寄り添う社会科教員のアプローチとして，①時期や場所を明確にした授業外での質問対応や学習の場を設定すること，②生徒との関わりを増やすことで，教員に対して相談や援助アクセスを容易とする雰囲気を作ることの２点を挙げた。

５．本研究の成果と課題

第５章では，本実践課題研究における成果と課題を述べた。成果として，授業外の学習機会の設定と，教員に対する相談・援助アクセスを容易とする雰囲気づくりを示唆した。生徒と教員間の人間的な関わりについての工夫が，学習面のみならず，教育活動を通してつまずきに寄り添うこと，そして生徒の人間形成に大きく関係する。課題として，生徒の思考力・判断力を高めるための具体的な手立てを検討することや，学習面以外の異なる側面からつまずきを捉えることが残される。本研究は，限られた事例であるため，更なる研究の蓄積を図りたい。